九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Midlife and late-life handgrip strength and risk of cause-specific death in a general Japanese population : the Hisayama Study

岸本, 裕歩

https://hdl.handle.net/2324/1807141

出版情報：九州大学, 2016, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

（別紙様式２）

氏　　名	岸本　裕歩
論　文　名	Midlife and late-life handgrip strength and risk of cause-specific death in a general Japanese population: the Hisayama Study
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　馬場園　明 副　査　　九州大学　　教授　　萩原　明人 副　査　　九州大学　　教授　　須藤　信行

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

高齢者において握力の低下は総死亡の危険因子であることが報告されている。しかし、一般住民において中年期に測定した握力と総死亡および死因別死亡の関係は明らかでない。

40 歳以上の日本人地域住民 2,527 人（男性 1,064 人、女性 1,463 人）を 19 年間前向きに追跡した。対象者を性・年齢階級別に分けて各群の握力レベルに基づき 3 分位し、それぞれの同分位群を合わせて 3 群を作成した（T1 群：最低値群、T3 群：最高値群）。

追跡期間中に 783 人が死亡した。その死因の内訳は循環器疾患 235 人、悪性腫瘍 249 人、呼吸器疾患 154 人、その他の疾患 145 人であった。40～64 歳の中年者において、多変量調整後の総死亡のハザード比（95%信頼区間）は、T1 群と比較して T2 群で 0.75（0.56-0.99）、T3 群で 0.49（0.35-0.68）と有意に低かった。65 歳以上の高齢者も同様に、T2 群では 0.50（0.40-0.62）、T3 群では 0.41（0.32-0.51）であった。死因別にみると、中年者・高齢者ともに握力レベルが高くなるにしたがって循環器疾患、呼吸器疾患、その他の疾患による死亡のリスクが有意に低下したが、悪性腫瘍死亡のリスクとの間に明らかな関連はなかった。

日本人一般住民において中年者と高齢者の握力は、総死亡、循環器疾患死亡、呼吸器疾患死亡、その他の疾患死亡との間に負の関連を呈することが示唆される。